
凡人・大木広人の事件簿 ～密室、消えたP & Uの謎～

AQ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

凡人・大木広人の事件簿　〈密室、消えたP&Uの謎〉

【Nコード】

N0054Z

【作者名】

AQ

【あらすじ】

誰よりも平凡な男を自称する、高二男子・大木広人……通称凡ちゃん。

文化祭委員として早朝登校した日、下駄箱前で事件は起きた！

その日学校に集ったメンバーは、彼を含めて四人。

親友のウメ、気さくな女友達の葵、憧れの美人転校生水瀬、そして第五の人物……。

世にもくだらない事件は、予想外の結末を迎える、か——？

※ミステリファンの方に怒られそうなバカバカしい話を、真面目に書きました。

一応謎解きっぽい感じで進みますが、日常モノですので、単純にラブ風なエンターテイメント作品としてお楽しみいただければ幸いです。

その1

みっちゃんみちみちウ○コ垂れて♪

紙がないから手で拭いて♪

もったいないから食べちゃった♪



学校という建物は、なぜ高台の上にあるのだろうか？

ニヨロニヨロと続く長い上り坂を、俺は息を切らせながら歩く。

苦しいのも全て自業自得、運動不足のたまものだ。

そんな俺の隣で、長い脚を武器にチンタラ歩いているのは、親友
と言つてやらなくもない『ウメ』こと梅宮。

ウメは、唐突にでかいアクビをした。

「ふわぁーあ……」

「……ふわぁー」

「なあ、凡ちゃん。なんでアクビって伝染するんだろーな？」

「さあな。前テレビでやってた気がするけど、忘れたな」

俺は、目尻の涙を拭いながら生返事をした。

ウメを筆頭に、気の置けない友人達から『凡ちゃん』と呼ばれる
のもすっかり慣れたが、実際俺の名前に『凡』という漢字は一文字
も無い。では、なぜそんなあだ名がついたかという……。

「さっすが凡ちゃん。相変わらず平凡なりアクション」

——そう、俺が『平凡』極まりない人間だからである！

……この理由すら、平凡の極みだ。

「サンキュ。お礼に必殺技の『平凡パンチ』をお見舞いしてやろう」

俺は、大げさに握りこぶしを振り上げてみせる。が、ウメは余裕
綽々といった笑みで俺を見下ろしてきた。まさにノーガード戦法。

コイツが俺よりスゲーと思うことは幾つもあるが、特にリスペク

トしている点は、中学の頃“悪かった”ことだ。といっても、ウメが口で言っているだけなので証拠はないが、素直な俺はウメの語る『伝説』を信じ切っていた。

俺は人を殴るなんてシチュエーションに立ち会ったことは無いし、当然オヤジに殴られたことも無い。『殴った手の方が痛いんだよ』という正論を知ってからは、ますますそんな勇氣も出ない。一時の怒りより指の骨が大事だ。

俺は自嘲しながら、貧弱な拳を下ろした。

「ふふっ……いいのさ。俺は真名まなの通り、広い心を持った人間だからな」

「そうそう、あまり印象に残らな……いや、オレはお前のこと愛してるぜ？」

「サンキュ。お礼に必殺技の『平凡デコピン』をお見舞いしてやろう」

ウメが泣きを入れる前に、特技であるすばやさを活かして必殺技を繰り出し、俺は満足した。

俺の名前は、大木広人おおきひろと。

決して悪くない名前だが、画数が少ないせいか印象の薄さは否めない。

ついでに『広』の字を『凡』に置き換えると、そういう芸名のヘタレ系タレントと同姓同名になる。あだ名の由来はこのへんにもあるのだろう。

悲しいくらいルックスが平凡なもの、親の遺伝子のせいであって、俺のせいじゃない。

身長は百七十センチちょいで、中肉中背。床屋で適当に切った黒髪の短髪、何度か顔を合わせた相手にも「初めまして」と高確率で言われる、のっぺりした純和風な顔立ち。

小学校低学年くらいまでは、運動が得意で活発な男児だった。中学でも、サッカー部でそれなりに頑張っていた。中二の頃から視力

が落ち始め、レギュラーを降ろされたのが運のツキ。

不貞腐れた可愛くないメガネっ子の俺は、たいした受験勉強もせず、なんとか近所の高校に滑り込んだ。高二になった今は、ゲームと漫画に夢中の立派な帰宅部員だ。成績も中の下といったところ。

かといって、この平凡な人生に別段不満も無い。こんな俺にも「愛してる」と告白してくれる親友がいる。数はさほど多くないが女友達だっている。

彼女いない歴イコール年齢だが、まだ焦りは……ほんの少ししかない。ゲームの世界では二次元の美少女たちに激モテだし、最近は転校生の美少女にドキドキしたりもしている。（もちろん、後者はゲームの話ではない。三次元の話だ）

こんな感じで、着々と平凡な人生を歩んでいる俺にとって、今日という日はかなり非凡な一日だった。

なんせ、日も昇らないくらい朝早くから、学校へ向かっているのだから。

「ふわぁーあ……」

「……ふわぁー」

なぜアクビが移るのかは分からないが、アクビが出る理由は分かる。昨夜コイツと二人で、とあるギャルゲをクリアするために、ほぼ徹夜してしまったせいだ。

俺は、ぼっくりと大口を開けても絵になる、親友の横顔をのぞき見た。

ウメは一見、なぜ俺と仲が良いのか分からないくらい派手な男だ。背も高く脚も長い。顔はアイドル風。ジャニーズでもグラビアで映える美少年系というよりは、無理矢理ロックバンドを組まされる系の、男っぽくエキゾチックな雰囲気を持っている。

しかし、天は二物を与えず。ウメは、性格にやや難アリ物件だ。竹を割ったようなと言えば聞こえはいいが、悪く言えば『空気が読めない』タイプ。

ウメは、親友である俺以外にも強烈なあだ名をばら撒く。入学当

時、ちよつとふくらした女生徒に『デブジャージ』なんて付けてしまったのはマズかった。噂は光の速度で広まり、正義感の強い女子達から総スカンを食らって以降、特に目立ったモテ方はしていない。

まあ本人も、今は彼女など作らずとも人生をエンジョイしているようだが。

「あー、かったりー。なんでオレ達がこんな早起きしなきゃいけないんだよ……」

「それは俺らが“文化祭委員”で、お前がその仕事を今まで逃げ回ってきたからだろう？」

現在、時刻は早朝五時半。「早起きは三文の徳」とじいちゃん化する俺に、ウメは駄々をこねる孫のように反論する。

「でもよー、地味に仕事できる凡ちゃんはまだしも、オレは一ミリも役に立たないと思うぞ？」

もう定番化した『ウメはやればできる奴なのに』の台詞は、何度目かのアクビに乗っ取られた。俺は眼鏡を押し上げ、溢れる涙を指先で拭う。

「俺もたぶん今日は役に立たないわ。ったく、ウメがシツコイから……ふわぁあつ」

昨日は、ウメが俺の家に泊まりに来た。通学鞆はロッカーに放り込み、財布と携帯だけズボンのポケットに突っ込んで、学校からそのまま直行。早めに夕飯を食べて風呂に入ったというのに、うっかりゲームをやり始めてしまったのが失敗だった。お互いゲームに関しては「勝つまでやめない」ゲーセン魔人なので、ぬるいギャルゲといえど手は抜けない。結局意中の子を落とすまで、コントロールを手放せなかった。

気付けば無く子も黙る丑三つ時……二時間ほど爆睡し、五時にセツトした目覚まし時計と母親の怒鳴り声に叩き起こされ、家を放り出されて今に至る。

「そもそも文化祭委員なんて、優秀な“葵サマ”に任せときゃいい

いんだよ。なあ凡ちゃん？」

ウメは、掃除やらクラスの仕事を良くサボる。俺といえば、「将来は公務員」と家族に太鼓判を押されるほど律儀な性格。教師や女子からの評判は上々だ。そして、女子にはすっかり『ウメのマネージャー』のレッテルを貼られている。

毎度ウメに対するクレームを持ち込んでくるのが、女子のリーダー格である葵だ。

「確かに葵は優秀だよなあ。昨日ウメを俺ん家に泊めたのだって、本当は葵の指示だし。『お前を一人にすると絶対朝ミーティングをすっぽかすから監視しろ』ってお達しがあってね」

「ウゲッ！ あのでしゃばりデブ女……」

「おいおい、本人の前でそれ言うなよ？ 半殺しじゃすまねーぞ？」

葵はウメが言うほど太ってはいない。ぽっちゃりして愛嬌がある小動物みたいだ。とにかく明るくて良く喋るクラスのムードメーカー。人見知りしない気さくな性格だから、男女問わず人気が高い。

葵が文化祭委員を任されたのは、去年もその仕事を引き受け、クラスのイベントを大成功させたという実績を買われたせいだ。そして、俺が引き受けたのは『推薦入試を受けたいなら、こころで一仕事しておいた方がいいぞ？』という担任の囁きに釣られて……ウメが釣られた理由は不明だが、何か裏があるに違いない。

ウメと葵は、一見犬猿の仲と思われている。担任は「なんとか間に入って調整してくれ」と俺に懇願してきたが、二人は案外気が合っているのは周知の事実。

まあ、ケンカするほど仲がいいってヤツだ。

「そもそも文化祭なんて、ミスコンだけ見れりゃ満足だって。当然、生徒会長は本命……でも今年是对抗馬が居るし、楽しみだなあ」

むふふ、と鼻の下を伸ばすところがまた「エロイ」と女子からの評価を落とす理由だが、当の本人は一向に変える気配が無い。俺も突っ込みたところだが、ミスコンのことを想像するといつてニヤけてしまう。

去年のミスであり今年三年の生徒会長は、どの角度から見てもパーフェクトな美女だ。ただ、美人過ぎて近寄りがたい。

それに比べて、件の転校生は……。

「なあ、やっぱ水瀬さんもミスコン出ると思うか？」

「……さあな。転校してきたばっかだし、大人しそうだし、そういうの苦手なんじゃないのか？」

うしし、と頬をつり上げるように含み笑いをするウメ。何が言いたいかは察している。このネタは地雷だ。こういうときは逃げるに限る。

ちょうど、学校から一番近いコンビニが見えてきた。

「あ、そーいや俺、買うものあったんだ。コンビニ寄ってくわ」

「じゃあオレは先に行つとく。昨日からウ○コ我慢してたのが、そろそろ顔出しそう」

「――バカッ、早く行けよ！」

俺が叫ぶと、ウメは高らかに笑い声を上げながら走って行った。



早朝の学校は、薄闇も相まって新鮮な印象だった。

重いコンビニ袋をぶらさげながら、色づき始めたプラタナスの並木道を通り抜け、校門をくぐる。グラウンドには人っ子一人居らず、校舎の右端の用務員室と、左端の職員室にだけ明かりがついている。快い静寂は……俺が校内に足を踏み入れたところで、ぶち壊された。

「――だからアンタには任せられないってのよ！ このアホウメ！」

「はいはい、分かったよ。ほら、大好きな凡ちゃんが来たぞ？」

まるでリードから解放された子犬のように、小柄な葵がすっ飛んで来た。たすき掛けにしたショルダーバッグの紐が、豊満な胸に食い込んで目のやり場に困る。

「大木クン、おはよっ！ 本当に大好きっ、アホウメと違ってねっ」

戸惑う俺に頓着せず、表情をコロツと変え、両手を腰にあて噛みつかんばかりにウメを睨みあげる葵。ウメがまた何か葵をからかうような発言をしたに違いない。俺が居ればこじれる前に止めてやったのに。

「ったく、朝っぱらから、お前ら本当に元気だなあ」

「もうウメのことは放つといて、文化祭はアタシ達で頑張ろうねっ！」

「俺はウメをこの時間に連れてきたことで、既に力尽きたぞ？」

「ホント、偉いよ大木くん！ さすが敏腕マネージャー！」

葵の微妙な褒め言葉に苦笑しながら、俺は踵を踏みつぶしたスニーカーを脱ぎ、靴箱前のスノコに乗った。拾い上げたスニーカーは、安物のコンバース。靴底がすり減ってボロボロだけれど、そこが気に入っている。「そろそろ洗濯しなきゃな」なんて考えているところに、ある人物がやってきて……俺は、靴をボトツと落とした。

「——おはよう。葵ちゃん、梅宮君、大木君」

「おはよ、ミナ！ 先に来てたんだっ」

葵が、廊下の向こうから歩いてきた一人の少女の元へ飛んで行く。少女は、口元を覆ったマスクを外すと、真っ白い歯を見せながら屈託の無い笑顔を向けてきた。

「うん。お母さんが車で送ってくれて……ちよっと早く着き過ぎちゃったから、保健室寄ってたの」

俺はその笑顔を直視できず、ブラウスの胸で揺れる彼女のリボンや、引き締まったウエスト、短めのスカートの下から覗くほっそりとした足のあたりと、うろろう視線を彷徨わせた。そんな俺を、ウメがニヤつきながら見ているとも知らずに。

水瀬咲子。この二学期からうちのクラスに加わった、いわゆる時期外れの転校生だ。噂によると両親が離婚したため、母親の実家があるこの町に移り住んだらしい。

文化祭のミスコンで『対抗馬』と噂されるだけのことはある、誰もが目を奪われるような可愛いルックス。名前の通り、みずみ

ずしく透明感のある素肌と、花が咲くように可憐な笑顔。その裏に隠れた、両親の離婚という悲しい過去と、不意に見せる儂げな表情……。

様々なステータスが針を振り切るほどレベルの高い彼女を見て、うちのクラスの男共は完全にノックアウトされた。当然クラスの平均値男と名高いこの俺も、例外ではない。

俺は、はしぎながらイチヤつく女子二人を尻目に、ウメに小声で話しかけた。

「おい、なんでここに水瀬さんが居るんだっ？」

「葵と水瀬さんの二人になったんだって。うちのクラスの文化祭委員女子。先生が『クラスに早く溶け込めるように』ってご指名で追加オーダーしたらしいぞ」

いかがわしい飲食店みたいな言い回しに突っ込む余裕も無く、俺はウメの耳元で凄んだ。

「……てめー、それ知ってたな？ お前がすんなり委員なんて引き受けた時点で、オカシイと思ったんだよっ」

「そりゃ、水瀬さんとお近づきになる大チャンス……なーんてなっ。オレはただ凡ちゃんの甘酸っぱい初恋を、近くで見届けたいなーと」

「ちよっ、デカイ声出すなって！」

俺が思わず声を荒げたとき、耳に心地よいハイトーンボイスが届いた。

「二人って、本当に仲がいいんだね」

いつの間にか、水瀬さんが俺達の傍に居た。鈴が鳴る様な声とは良く使われる表現だが、水瀬さんの声はまさにそれだった。俺ら男子のダミ声と比べれば、同じ声帯を持つとは思えない、軽やかな声が静かな校舎に響き渡る……それだけで心が洗われる。

「まあねー。オレと凡ちゃんは、ラブラブってヤツですよ。昨日もお泊りデートだったし。オレらが寝ないで何してたか、知りたい？」

固まる俺と対照的に、テキトーな軽口をたたき始めるウメ。さすが葵がカットインする。

「ウメったらやめてよ！ ミナは清純なんだから、変なこと教えな
いで！」

「ふふっ、梅宮君って面白いねえ」

会話が弾む中、俺は首を縦や横に振ることしかできない。なんせ、
視界に水瀬さんの姿が入るだけで、心臓が爆音を立てるのだ。激烈
美女な生徒会長を見てもこんな風にはならないのに……これが『恋』
というものなのだろうか？ 例えるならば、子どもの頃お祭りで食
べた『あんず飴』のように、甘酸っぱい気分……。

とにかく冷静にならねばと、俺は転げ落ちたスニーカーを拾った。
そのまま靴箱を開けようとして、チツと舌打ちする。

うちの学校の靴箱には、各自が鍵をかけるようになっていて。と
いうのも、上履きを兼ねる体育館シューズの盗難が多発したせいだ。
百円ショップで買った小さな南京錠が、俺の靴箱の取っ手にもぶら
下がっている。

片手に重いコンビ二袋、片手にスニーカーを持ち、両手がふさが
っていた俺はウメに言った。

「なあ、ウメ。俺の携帯に鍵ついてるから、靴箱開けてくれよ」

「はいはい、ではお尻を出してくださいませ、ご主人サマ」

貴族のように気取ったお辞儀をしてみせるウメ。頼まなきゃ良か
ったと猛烈に後悔したが、時既に遅し。葵は「執事カフェみたい」
と爆笑しているし、水瀬さんもつられて笑っている。笑うたびにブ
ラウスの肩先で揺れる栗色の柔らかい髪が、朝日を乱反射して輝く。
自虐的なネタであれ、こうして水瀬さんから笑いが取れたことは
悪くないのかもしれない。昨日までは一クラスメイトで、名前すら
知られていなかったはず。でも彼女はついさっき、俺の名を呼んだ
のだ。まあ、ウメの名前も呼んでいたし、既にウメの方が親しくし
ているけれど……。

俺の尻ポケットから携帯を抜き、靴箱へ向かうウメの背中に「と
っとと失言して嫌われろー」と邪念を送る俺に、葵が話しかけてき
た。

「それにしても大木くん、どうしたのその荷物。遠足行くみたいよ？」

「ああ、母ちゃんがさ。葵達と朝一番でミーティングだって言ったら、いつもお世話になってるからって小遣いくれた」

掲げたビニール袋の中には、俺とウメ二人分の朝食と飲み物、さらには葵が好きな惣菜パンやスナック菓子がたっぷり詰まっている。「いゃん、大木ママ大好きっ！　いつでも嫁に行きますって伝えてっ」

「バツ……何言ってるんだよっ」

誰かれ構わず「好き」だの何だのと思わせぶりの発言をするから、葵は男にモテる。いつもなら笑ってスルーするところだが、今だけは「空気嫁！」と突っ込みたい。うちの学校に来たばかりの水瀬さんが、葵の発言の軽さをどこまで理解しているのか……万が一、本気で受け取られたら悲し過ぎる。

俺がさりげなく話題を変えようとしたとき、ウメが先手を取った。

「おい……」

低過ぎる声が、軽快な空気を変える。

見たことも無いくらい真剣な顔をしたウメが、渡した携帯で俺の肩をゴツンと叩く。複数つけたアニメキャラのストラップが、ジャラリと音を立てる。

「これ、見てみろよ……」

俺の靴箱へと視線を向けながら、声を震わせるウメ。

俺と二人の女子は、ウメの背後からそっと俺の靴箱を覗き込んだ。その瞬間、ウメが壊れた。

「――ギャハハハッ！　パンツ！　ウ○コ！」

俺の目が、信じられないものを捉えた。これは夢だと思ったけれど、両手に掴んだ荷物が俺に頬をつねる動作を許さない。

上下二段に分かれた小さな靴箱の中、上の段には体育館シューズが収まっている。

そして空っぽのはずの下の段には、一枚の白い布。

まさに、女性用のパンティだった。母親が物干しにぶら下げているベージュとは違う、純白レースで、リボンのついた可愛らしいデザインのこと……。

その眩しい白の上に、ころりと転がっている、細長く黒い塊があった。

その2

一度目を逸らし、もう一度確認する。何度見ても、パンツとウ○コだ。

「パンツと、ウ○チ……ふふっ、なんで……？ プハハッ！」

呆然としていた葵が、堪え切れなくなって笑い出す。水瀬さんは、あまりの非日常的な光景にショックを受けているのか、無表情で立ちつくしている。

俺はとりあえず、しゃがみこんで爆笑するウメを蹴飛ばした。こんな悪戯をするような奴は、一人しか思い浮かばない。

それは、目の前のコイツだ。

「ウメ！ てめーっ、今自分でコレ入れたんだろっ！ ふざけんな！」

俺の渾身の蹴りも、ウメには一ポイントのダメージも与えられない。腹を抱えるだけでは治まらず、ついにはスノコの上に尻もちをついてヒーヒー言い出したウメは、涙を流しながら答えた。

「オレじゃねえって！ オレが手ぶらなの、お前も見てただろーがっ！」

「ざけんなっ！ お前以外に誰が、こんなくだらねえ悪戯をつ！」

俺が、手にした二リットルペットボトル入りの袋で、ウメの頭を殴ろうとしたそのとき。

「――コラッ！ 何を騒いでる！」

「やべっ……」

スノコの上に転がっていたウメが、シャキンと音を立てるくらい一瞬で立ち上がり、直立不動の姿勢を取った。

やってきたのは、無駄に暑苦しいと生徒から不評の体育教師、新堂だ。あだ名はゴリゴ31。命名はウメだが、今やそう呼ばない生徒は居ないほど定着している。

今年三十一歳のゴリゴが未だ独身なのは、とある動物と某有名漫

画のキャラを足して二で割ったような風貌のせいだけではないだろう。そろそろ夏服の季節も終わりだというのに、ゴリゴはランニングに短パン姿で校内を闊歩している。濃過ぎる顔立ちに、もじゃつと生えたスネ毛が見苦しい。

見た目もキツイが、性格はもっとキツイ。些細なことで生徒達に干渉し、問題を大げさに煽りたてたり、時には頭ごなしに怒鳴りつけるのだ。その行為が「愛情の裏返しならぬ空回り」と評したのは、他でもないこのウメなのだが、確かに言いえて妙だ。

俺からすると、決して悪い先生ではないのだが……こんなときに会いたくないランキング、ナンバーワンの人物であることは間違いない。

「どうした。何かあったのか？」

ノッシノッシと床に敷かれたスノコを揺らしながら近づいてくるゴリゴに、俺とウメは何となく罰の悪さを感じて目配せした。今さら靴箱を閉じてても、怪しいだけだ。「何でもありません」としらばつくれたところで、ここを覗きこまれたらすぐバレる。

「いや、あのう……」

「なんだ、はつきり言いなさい」

元ヤンのくせに、教師にはからつきし弱いウメが口ごもる。代わりに俺が口を開いた。

「俺の靴箱に、ちよつとした悪戯が」

「何っ？ 見せてみる」

熱血教師として、見過ごせないと思ったのだろうか。もしくは、頻発する盗難事件が頭をかすめたのか。

真面目な顔で俺の靴箱を覗き込んだゴリゴは……真っ赤な顔をして吹き出した。

「おっ、お前ら、なんてくだらない悪戯をつ……ウハハッ！」

「せ、先生、ヒドイっす！ 笑うなんて……ぷはっ！」

せっかく止まっていたウメの笑いのツボが、ゴリゴの野太い笑い声によって再び押された。俺の背後でビクついていた女子二人も、

怒られるという緊張感から解放されたのかクスクスと笑い出す。

「全く高校生にもなって、しょーがない奴らだ。これは俺が処分しておいてやるから、お前らは教室に行け」

「はぁーい」

優等生の葵が素直な返事をする、仁王立ちしたゴリゴはうんうんと頷いた。

「そうだ、一応これは悪質な悪戯ってことで、担任に報告しておくからな。いいな？ 二年B組大木広人」

緩みかけた空気が、ピリツと引き締まった。

この熱血教師は、なぜか俺に興味があるらしい。入学当時、体育の授業で軽く活躍してからというもの、顔を合わせる度に「サッカー部へ入れ」と誘われ続けて一年半。愛想笑いには定評のある俺も、さすがに辟易していた。

つまり、ゴリゴは恐ろしくシツコイ性格なのだ。

「でも先生、別に俺は気にしてないんで」

何事もあっさりスルーが基本、嫌なことはすぐ忘れてしまう俺とは、まるで正反対だなあ……なんて、内心溜息を吐いた俺に、予想外の台詞が飛んでくる。

「お前がそう言ってもな、これが“いじめ”だって可能性があるんだぞ？」

そうか、俺はいじめられっ子だったのか……そう思いかけて、ハッと気付く。

この展開こそが、犯人の思うツボなのではないかと。

「先生、このこと黙っててください。そうじゃないと俺っ」

「よしよし。とりあえず後で話はゆっくり聞いてやるからな？」とにかく教室に入っとけ。委員会の仕事もあるんだろう？」

ごつい手が俺の頭をわしわしと撫でる。俺の脳みそをぐらんぐらんと揺さぶると、「さて、軍手とビニール袋は職員室にあったかな」と鼻歌混じりに呟きながら、ゴリゴは去って行った。

俺はウメを、本気で睨みつけた。

「おい……なんだよこの展開。マジでお前が犯人じゃないのか？」
「オレじゃねえって。でも、この流れはちよつとヤバイな。ていうか、お前——」

そこで、ブフツとウメが吹き出した。

「いぢめられっこだったのかよっ！　ウ○コ菌！　高二で菌扱い！
しかもパンツ泥棒！」

「てめえっ！」

赤いカーペットの上を爆笑しながら逃げて行くウメが、「ウ○コえんがちょー」という遠吠えをたなびかせ、整然と立ち並ぶ靴箱の影に消える。その姿を追おうとした俺を、背後のクスクス笑いが引きとめた。

そろりと後ろを向くと、女子二人が曖昧な笑みを返してくる。

二人のつぶらな瞳に浮かぶのは……あからさまな同情。

「……あの、葵ちゃん、大木君。私用務員室寄って、保健室の鍵返してくるね。だから先教室行ってて」

水瀬さんがスカートのポケットをまさぐり、思い出したようにマスを装着した。慌てて葵がその傍らに寄り添う。

「ゴメン、ミナ。体調悪いのに立ち話しちゃって」

「ううん。さっき熱計ったけど、平熱だったからもう大丈夫だよ」
小柄な葵が軽くつま先立ちし、水瀬さんの額へと指先を伸ばす。

「うん、平熱みたいだね」「もう、葵ちゃんってば心配性なんだからあ」なんて……公然とイチヤつき始める。

すっかり蚊帳の外状態な俺は、ここぞとばかりに水瀬さんの麗しい姿を再スキャン。

ふわりと柔らかそうな栗毛、日光に当たった形跡の見られない純白の柔肌、ほっそりとした首と、襟元から覗く肩甲骨。葵とは対照的に薄い胸は、俺の許容範囲……むしろ好みのストライクど真ん中。ブラウスの胸ポケットには、窮屈そうに納まるケータイ。ストラップとしては大き過ぎるデイベアが、その顔を水瀬さんの胸に向けてしがみつくポーズをとっており、若干の嫉妬を覚える。その下は

引きしまったウエストと、するんとした紺色のプリーツスカート、長さは膝上十センチ、さらに脚は……。

「んじゃアタシ、おトイレ寄ってから教室行くわ。さっきウメと会って入りそびれちゃったし」

「じゃあ教室でね。大木君も」

二人は手を振り、別々の方向へ。俺の目は水瀬さんのモチツとした美脚を必死で追うも、すぐに靴箱に隠れて見えなくなった。

一人残された俺は、うなだれながらとぼとぼと歩き出した。手にした荷物がやけに重く感じる。

水瀬さんとお近づきになれる、またとないチャンス。その他大勢のクラスメイトからランクアップした瞬間、俺は『パンツ&ウ○コ男』として、彼女の記憶に鮮烈な印象を与えてしまった……。

というか、実際彼女を舐めるように見てしまった俺は、真性のヘンタイだ……。

「いやいや、アレはどんな男子でも見るだろう。つーか、これは逆にチャンスかもしれん。第一印象が最悪なら、あとは上がっていくだけだからなっ！」

自分を鼓舞しつつ歩いていると、不意に足の裏がひやりと冷たさを訴えた。カーペット敷きの床が終わり、階段部分に差しかったのだ。そこで初めて、自分が靴下のままだということに気付いた。

両手には、重い荷物とスニーカー。パンツとウ○コにすっかり気を取られて、上履きに履き替えるのを忘れてしまった。

慌てて駆け戻り、半開きのまま放置された靴箱を覗いたとき、俺は不思議な光景を目にした。

「アレが……無い？」

散々笑いの種になった二つの異物……パンツとウ○コが、跡形も無く消えていた。



適当に四つの机を寄せ合った小島に、買い込んだパンやスナック菓子を広げながら、俺はその事実を告げた。

「――ええーっ！ 消えたっ？」

早速大好物のコーンマヨパンを頬張った葵が、喉を詰まらせつつ叫ぶ。

「消えたって、意味ワカンネー……ヤバイ、ウケる……」

口の中の物をスプラッシュしかけたウメは、両手で口を抑えてうつむき、笑いを堪えブルブル震えている。

「あ、このチョコ美味しいっ」

水瀬さんはマスクをつけたまま、一口大のチョコ菓子を嬉々として摘んでいる。零れ落ちそうなほど大きな目を、糸のように細めて。「葵ちゃんもどう？」なんて小箱を差し出したものの、葵はパンをぐくんと飲み込み「ごめん、今ダイエット中だから」と、若干矛盾したことを口にして突っぱねた。続けてウメ、俺と小箱を向けるものの、俺たちは甘い菓子に興味がないため、首を横に振る。結果、水瀬さんは「やった、一人占めだ」と幸せそうに微笑んだ。

……どうやら水瀬さんは、意外と天然キャラらしい。

それとも、俺のためにわざと話題を逸らそうとしてくれ……いや、それはないか。

俺はポカリ入りの紙コップを勢いよくあおると、三人を見つめながら神妙な面持ちで話しかけた。

「ゴホン。で、昇降口で解散した後の話な。俺が靴箱の前を離れてから上履きを取りに引き返すまで、正確には分からないけど、ほんの一分つてとこだと思う。ゴリゴは職員室に行くってのんびり歩いてったし、往復でも最低三分はかかるだろ？ だからゴリゴが来る前に……ブツが消えたんだよ」

ナイフみたいに尖った俺の視線を受けて、ウメが大げさに両手を横に振った。

「おいおい、オレのことまだ疑ってんのかよー」

「どー考えても、容疑者お前しかいねーしっ」

「でもさあ、良く考えれば不思議じゃない？」

詰まった喉をジュースで洗い流した葵が、神妙な面持ちで眉根を寄せながら身を乗り出した。なんとなく全員、そっと顔を寄せ合う。

「あの靴箱、最後に使ったのって大木くん本人でしょ？」

「ああ、もちろん」

「それって、昨日の夕方だね？」

「そうだな」

「そのとき、靴箱には何か置いてあった？」

「いや、別に何も……」

「ちゃんと、鍵もかけて帰ったんだよね？」

「そりゃ当然。俺、最近上履き買い換えたばっかだし、そこは注意してたから」

「他に合鍵を持ってる人は？」

「はあ？ 居るワケねーだろ。おい葵、まさかそれって……」

葵の追及の意味が、俺にもようやく分かった。同時に、皆にも分かったようだ。

探偵ばりのニヒルな笑みを浮かべ、ふっくらした頬にコインの欠片をくつつけた葵が、皆の目の前にビシリと人差し指を立てる。

「昨夜鍵をかけてから、今朝開けるまで……あの靴箱は、完全な密室だったってことよ！」

密室！

……に、パンツとウ○コ！

「葵……それ当事者としては全然面白くねーし……」

脱力する俺の肩を、身を乗り出した葵がバンバン叩きながら、興奮を露わにする。

「まあいいじゃないっ。あれを死体に例えたら、一気に本格ミステリでしょ！ 密室で死体が発見された直後に、一瞬で消えちゃったって話なんだから！」

「死体……パンツと、ウ○コがっ……ククッ」

勝手に盛り上がる葵と爆笑するウメ。そして、マスクの下の口元

は見えないけれど、ぱっちりした目を細めて小刻みに震えている水瀬さん。

俺は深い溜息と共に、至極マトモな推論を告げた。

「まあ、アレが消えたことに関しては、ゴリゴが途中でビニール袋見つけて、すぐ戻ってきたせいかもしれないし」

「――おいっ、大木いるか？」

ナイスタイミング、と囁く葵。教室の後方ドアにもたれかかるようにして、軍手をはめたゴリゴが白いビニール袋をヒラヒラ振っていた。

「さっきのアレ、大木が自分で片付けたのか？」

ゴリゴが片付けたという俺の説は、その一言であっさり覆された。俺は目まぐるしく変わる状況に適応すべく、必死で頭を働かせる。自分にとって最も都合が良い返答を導き出すと、さも相手のためにやったんだという体で告げた。

「……あっ、はい、そーです。すみません。先生の手を煩わせるのもナンなので……」

「そうか……まあいい。パンツの方は犯人探しに使えと思ったんだがな」

「あのっ、俺本当にいじめられたりとかしてませんからっ！ きつとアレも仲良い奴の悪戯なんで、見逃してやってくださいっ！」

ゴリゴの性格は、完全に掴んでいる。有り余る情熱に一度火がつくと長引くのだが、基本は熱しやすく冷めやすい。

今が火消しのチャンスとばかりに、俺は立ち上がりペコッと頭を下げた。

「あまりオオゴトになると、俺マジで『パンツ』とか『ウ○コ』とかあだ名つけられて、いじめられかねませんのでっ。これから進路決める時期ですし、煩わされたくないんですっ」

「フムン……そうか。分かった」

筋骨隆々の腕でドスンと胸を叩くと、ゴリゴは言った。

「まあ、大木はしっかりしてるし大丈夫か。もし何かあったら、い

つでも相談に来なさい。また同じような目にあったらなっ」

ガッハッハという豪快な笑い声が遠く消えていき……俺は溜息を吐きつつ着席。するとウメが、俺を尊敬の眼差しで見つめてきた。

「やっぱスゲーな、凡ちゃんの処世術」

「……別に、フツーだろ？」

「オレはああいう暑苦しい奴って苦手。鳥肌立つわ。中学んときも逃げ回ってたし」

大げさにガタガタと震えてみせるウメに、俺は苦笑を返す。

「そー言われりゃ、俺は昔からあの手の先生は得意だったかな。特に小学生の頃とか、俺もかなりのワルガキで何度もやり合ってきたから。先生の方も、悪さすりゃガツンと拳骨落とすようなタイプだったしさ……」

最近の教師には、生徒ととことん向き合おうという熱意を感じなくなっただ。それとも、俺の方が冷めてしまったのだろうか……？

何の気なしにそんなことを考えていると、葵が身を乗り出してきた。

「へえー、大木クンって悪戯っ子だったんだ。あんまり想像つかないなあ。常にオッサン臭いっていうか、落ち着き払ってるイメージだもん」

「オッサン言うな。でもまあ、今まではすっかり忘れてたくらいだもんな。当時は俺もクリクリボーズ頭で、泥んこでそこらじゅう走り回ってたな。蛙やら虫やら捕まえては、女の子の鞆に入れて泣かせたり、スカートめくりしたり……」

と、不意に脳裏をよぎる、一枚のパンツ。お尻の真ん中に茶色いクマのイラストが描かれた、小さな白いパンツ。

俺のイタズラ戦績のフィナーレを飾るそのパンツが、今朝下駄箱で見かけた白いパンツと、一瞬だけ重なった……そのとき。

「――ふうん。その頃の写真見たいな」

ああいいよ……と生返事をしかけて、俺の口は『あ』の形で固ま

った。視線が右へ左へと忙しく彷徨う。

聴こえたのは、女の子の軽やかな声。しかし今、葵はジュースを飲んでいて、声を出すことはできない。

つまり『俺の写真を見たい』と発言したのは……。

「それナイスアイデア！　っていうか、皆で見せ合いっこしない？　アタシ、ミナのちっちゃい頃の写真見たいなっ」

「ハーイ、オレも美少女時代の水瀬さん見たいっ」

葵の提案に、すかさず便乗するウメ。水瀬さんは口元に手を添え、クスクスと楽しそうに笑いだす。

「別にいいけど、皆ビックリすると思うよ？　あの頃はいつも半ズボン穿いてて、良く男の子に間違えられてたから」

「うっそ、想像つかない。超楽しみ！」

ハイテンションではしゃぎ始める葵に、ウメがチャチャを入れる。

「あ、ついでにオレ、葵が昔痩せてたって証拠写真も見たいわ」

「だったらアンタも『元ヤンだった』っていう証拠写真出しなさいよねっ」

そうして始まる、恒例の口げんか。

俺の視線は、天使のように微笑む水瀬さんに釘づけになっていた。

その3

自己紹介がてらの過去暴露話は、大いに盛り上がった。

ゲーセン魔人な今の俺と違い、小学生の俺は非常に活発な男児だった……というネタで、俺はきつと水瀬さんに対するイメージアッぷを計れたのだと思う。脳内アルバムから引っ張り出したヤンチャな武勇伝に、水瀬さんはニコニコ上機嫌で相槌を打ってくれた。

しかし、ウメが余計な一言で水を差すのが、いつものパターン。「そんなに元氣ハツラツだったのに、なんでこんな残念な子になっちゃったんだ？」

「……さあな。良く覚えてねーや。つーか残念言うな」

なんてテキトーにツツコミを入れたところで、胸のもやもやは広がるばかり。

人生最初の挫折は、小学校低学年の頃。調子に乗ってヤンチャをし過ぎた結果であり、自業自得だった。

記憶が霞むほど昔のことなのに、今胸に広がる想いは中二でサッカーに挫折したときと同じくらい苦い。正直、あまり思い出したくない。つまりは、未だに傷が塞がり切っていないのだろう。

俺は脳内アルバムをボタンと閉じ、明るい声を立てた。

「さて、そろそろ仕事すっか。水瀬さん、その空箱くれる？」

「あ、うん」

いつのまにか軽妙な口げんかを再発させたウメと葵をよそに、ほとんど食べていない俺と甘いもの専門だった水瀬さんが、せつせと机の上を後片づけする。普段なら理不尽だと文句を垂れるところだが、今の俺は水瀬さんと初めての共同作業で……本当にお腹いっぱいだ。

机の上がキレイに片付くと、葵が白紙のルーズリーフとシャーペンを取り出した。

いざ本題の『クラスの出し物について』とっかかるのかと思いき

や……葵は宣言した。

「では、今から推理を始めます！」

「はあっ？」

「まずは、密室に現れたパンツとウン……これ人前で連呼するものなんだから、イニシヤルにしよう。えー『密室に現れて、消えたP&Uの謎』と」

そう言っ、紙の中央に四角を書き『P&U』と記す。

「ねえ葵ちゃん、文化祭のことは……」

「いいのいいの。今日の招集はウメへの嫌がら……じゃなくて、メンバーの親睦が目的だったんだから。なにより、こんな面白いことってめったに無いじゃない？」

学年一のお祭り女、葵が言いだしたらもう誰にも止められない。美術の成績も良い葵は、せっせと校内の見取り図らしきものを描いていく。

昇降口を中心に、左側にはゴリゴの向かった職員室。右側には、水瀬さんが向かった用務員室。保健室はその隣だ。下駄箱のすぐ裏手には、葵が向かった女子トイレ。そして廊下を進んだ先に、ウメが向かった教室へ繋がる階段。

こうして図にすると、見事に五人がてんでバラバラな行動を取ったことが分かる。

俺たちが感心して眺める中、葵は胸の前で腕組みをし、力強く告げた。

「まずは、密室の謎ね。P&Uが、いかにして下駄箱に閉じ込められたか……は置いとしましょ。考えたって分からないもの」

「葵は諦めが早えなー。ダイエットもその調子で諦めてるんだなっ」「もー、ウメは黙ってて！ あんたも重要参考人なんだからねっ！」
獣のように威嚇した葵は、ボブヘアの横髪をきっちり耳にかけ直す、空白部分に人の形を描き足した。

「では先に、消えたP&Uの謎について検証しましょう。事件発覚のとき現場付近に居たのは、うちら四人。その近くにゴリゴ。今の

ところ容疑者はこの五人ね。では、今日の行動を再確認します」

女子二人の頭にはリボンを、ゴリゴのマークだけゴリラ顔とスネ毛を描いて皆を一笑いさせてから、葵が言った。

「ねえ、ミナ。今日は学校に来てからうちらに会うまで、どーしてたの？」

「うんとね……最初は教室に行って、ロッカーに鞆置いたの。その後熱測ろうと思って保健室に行ったのね。保健の先生はまだ来てなかったから、用務員室で鍵借りて。熱測って教室戻るとき、玄関で葵ちゃん達の声がしたから」

「そっか。その間に誰か見かけた？ 用務員のオジサン以外に」

「ううん。誰も見なかったよ」

葵が、校舎二階にある教室、一階右翼に位置する用務員室と保健室、さらに昇降口までのルートにバツ印を付けて行った。

「誰かが隠れてたって可能性も考えなきゃいけないけど、まずはシンプルにね。えっと、アタシが着いたときは、玄関前には誰もいなかった。トイレ行こうと思ったら、ちょうど出てきたウメが声かけてきて……その後は、皆も知っての通り。解散した後も女子トイレ寄ったけど、個室は全部空いてたし、その後教室に戻るまでの間も誰とも会わなかった」

言いながら葵は、玄関奥の女子トイレにもバツ印を付けた。

本来このトイレは、来賓客も使うからあまり一般の生徒は使ってはいけないと指導されているが、葵やウメにとっては関係ないらしい。もつともウメは、ウ○コをしたくて焦っていたという理由もあるのだが。

「それで、ウメは？」

「オレが男子トイレに寄ったときは……必死だったもんで曖昧だけど、個室に確か一人……」

「ホント？ 誰よっ」

「それは……オレだよ」

ウメの整った顔が、痛みに歪む。

俺が繰り出すより先に、葵のデコピンがさく裂していた。伸ばし気味の前髪の奥、赤くなったおでこをさすりながらウメが叫ぶ。

「イッテ。この暴力女っ」

「はいはい。他には？ 教室来るまでに誰か見なかった？」

「見るわけねーだろ。何時だと思ってるんだよ。運動部の奴らだってまだ来ない時間だっつーのに……しかしゴリゴはなんでこんな早くから学校来てるんだ？ 怪しくねえ？」

「ゴリゴは、毎日こんなもんらしいよ？ 『明け方に全裸でグラウンドを走るゴリゴ』って七不思議知らない？」

「知るかよ……オエー。想像したくねえ」

ぶつぶつ言うウメを無視し、葵は俺のことをじいっと見つめてきた。

ぽっちゃりしてるけど実は可愛い……そんな評価を受けている葵の、珍しく真剣な面持ち。こんな風に上目づかいに見つめられると、女子に免疫の無い俺はドキッとしてしまう。葵の目はパッチリ二重で、睫毛が意外と長い。小さめの丸っこい鼻とアヒル口が、アイドルグループの誰かに似てるなんて、入学当時から結構な噂になっていたものだ。

睡眠不足に心労が重なったせいか、ぼんやりと葵に見とれていた俺の目の前に、ぷくつと短い人差し指が突き出された。

「――犯人は、あんたね！ 大木広人！」

「……はあっ？」

驚きのあまり息を呑んだ俺は、ゲホゲホとせき込んだ。

「ほら、その動揺っぷりが犯人の証拠！」

「何だよ、その大雑把な推理……」

「っていうか、どう考えても大木くん以外無理なのよねー。密室の話だって、大木くんが嘘ついて自分で仕込んだら簡単でしょ？ ついでに消えたときも、一番近くに居て“消えた”って主張してるのは大木くん。つまり……自作自演？ 愉快犯？」

葵だけでなくウメまでも、俺のことを疑惑の眼差しで見てくる。

まるで敏腕刑事の取り締まりのようで、Yシャツがじわりと汗ばんでくる。隣に座るウメが俺の肩を抱き寄せ、優しく囁きかける。

「なあ、凡ちゃんや。吐くなら今のうちだぞ？　田舎のお袋さん、泣いてるぞ？」

「ちよっ、待てよ！　俺はやってねえしっ！」

思わず腰を浮かせた俺は、白々しい視線を浴びて腰を降ろした。ムキになって否定するほど、ますます怪しまれてしまう。

葵の描いた図を見ながら、俺は落ち着いて自分の意見を述べた。

「確かに俺は、昨日の夜に靴箱を閉めた。中には何も無かったし、しっかり鍵もかけた。その後はコイツと一晩中一緒に居たし……今朝来たらあんなことになってたんだ。嘘じゃねーよ！」

「信じるよ」

それは、鈴が鳴る様な声。

一人の天使――マスクを外した水瀬さんが、俺に向かって微笑んでいた。うっとり彼女を見やれば、その唇にチョコのかけら。

ああ、こんなとき彼氏彼女だったら、この指でそっと拭ってあげるのに……。

俺の甘い妄想を遮るように、葵が冷たく言い放つ。

「それで、こんなアホな悪戯した動機はなんなの？　大木クン」

「お前なあっ……人の話を聞けって！」

「お生憎様。純情なミナは騙せても、このアタシの邪気眼はごまかせないわよ？　さあ吐け！」

「良く見ろ！　その邪気眼に俺の純白な心が映るだろうっ？」

全力で否定するも、のれんに腕押し。調子に乗ったウメが、葵の追及に便乗する。

「どーせ親友のオレを笑わせたかったんだろ？　さっき凡ちゃんは、わざわざ両手に荷物持って、オレに鍵開けさせたんだからさ。どこであのパンツとウ○コ手に入れたんだかワカンネーけど、そのお笑い魂は認めてやろーぜ？」

「そうねえ。パンツはネット通販でも買える時代だしね。ウ○チは

……良く覚えてないけど、ちょっと小さくて細かったよね。猫かなんかの拾ったの？ 昔うちでも猫飼ってたけど、時間が立つとアレ固くなって案外匂いも無くなるし、持ち歩いてても別に不都合は」
「待てっ、冤罪だっ！」

ニヤニヤ笑う二人を、俺は容赦なく睨みつけた。

「そんなこと言ったら、お前らだって充分怪しいんだぞ？ トイレ行った話も嘘で、ウメと葵でこっそり示し合わせて、俺をハメる相談してたかもしれないだろっ？」

苦し紛れに放った台詞に、ウメが「まあまあ」となだめてくる。

「凡ちゃん、嘘に嘘を重ねるほど苦しくなるんだぞ。俺が他人の家ではウ○コ出なくなる習性は、凡ちゃんも知ってるだろ？ あと俺がウ○コしたって証拠は、便器の縁にしっかり残っ」

「――ちよ、汚ねえ話すんなアホウメ！」

女子（といっても水瀬さんのみ）を氣遣い、俺はウメの赤裸々なアライバイ告白を強制終了させる。と、葵と目が合った。葵は爆笑しているかと思いきや、なぜか真顔でこう言った。

「……そっか、盲点だったわ。もしかしたらこれ、単独犯じゃなくて共犯者がいるかもしれないんだ。例えば、P&Uを仕込む係と、撤去する係。となると、ウメと大木クンがうちら女子を笑わせるために仕込んだって説も、案外信ぴょう性が……」

「いや、それも無いって！」

「……ま、無いわね。シラッ和大嘘つく大木クンはさておき、ウメは嘘つけない性格だし」

さりげなく俺のイメーজダウン工作を図ると、葵は細い眉をクツと寄せ「うーん」と唸り始めた。天才探偵の推理タイムとばかりに、大仰に腕組みをして……たっぷり十秒後。

「ま、メンドクサイから大木クン犯人説でいんじゃない？」

「コラ！」

と、すかさずウメがカットイン。

「ここは論理的に考えようや。オレも葵も嘘つかない誠実な人間だ

からシロ、当然水瀬さんとゴリゴもそんなことするキャラじゃない。つまり消去法で、犯人は凡ちゃんに決定」

息もぴったりに頷き合う二人。ウメがナイスアイデアを閃いたとばかりに、ポンと手を叩いた。

「てっとりばやく自白させるか。凡ちゃんの弱いところ、俺は全て知っている……」

危機感を覚え身を引く俺に、ウメの両手をワキワキしながらにじり寄ってくる。俺の危機を救おうともせず、好奇心いっぱいキラキラした目で見つめる葵。

俺は藁にもすがる思いで、斜め向かいの水瀬さんを見やった。しかし、バラの花弁のような唇が、もう一度「信じるよ」の台詞を漏らす気配は感じられない。むしろ葵と同じように、この展開を楽しむかのごとき薄笑いを浮かべている。

このままじゃ、俺はくだらない悪戯の犯人として、ウ○コレベルまでイメージダウンしてしまう！

「――俺はやってない！ だから、犯人を捕まえてみせる……じっちゃんの名にかけて！」

叫んだ俺の鼻息が、机の上のペンを転がすほどの嵐を巻き起こした。



俺は、皆を引き連れて靴箱前へ来ていた。

アドベンチャーゲームで学んだ知識によると、捜査で最も大事なステップは現場検証だ。どこかに犯人の痕跡が残っているかもしれない。遺留品とか、ダイニングメッセージとか。

「……ふむ。靴箱の高さは、ちょうど俺の目線だな。小さな子どもが悪戯したという可能性は消えるだろう」

「当たり前でしょっ」

すっかり俺を犯人扱いの葵が、唇を尖らせて俺を見上げる。その

横ではマスクをつけた水瀬さんが、困ったように小首を傾げている。ウメはその後ろで、ヘラヘラといけすかない笑みを浮かべる。

俺はニヒルな表情をつくり、居並ぶ靴箱の取っ手部分に目を向けた。

「密室っていうけどさ、もしこの鍵が誰にでも開けられるとしたら？ 所詮百円だし、いろんな奴の鍵とかぶってるだろ？」

ほぼ全員の靴箱に、俺と同じような南京錠がぶら下がっている。ダイヤル式だったり、俺と同じく小さな鍵を差し込むタイプだったり種類は様々だ。

「確かに大木クンと同じ鍵使ってるひとは、いっぱいいるけどさあ……本体の形が一緒でも、鍵の形までそっくり同じってことは無いんじゃない？」

「う……まあそうだな。でもこんなチャチな鍵、針金で簡単に開けられるかもしれないし」

小汚いスニーカーが収まっているだけの日中は、鍵をロックせず穴にひっかけている。俺は、自分の南京錠を手にとった。そのフック部分を押し込んで、一度鍵を閉める。そして、教室から持ってきた針金クリップの先を、鍵穴の中に突っ込む。適当にぐりぐりとかき混ぜて……結果、一分弱で諦めた。

「……ま、こういう作業が得意な奴が居てもおかしくはないし」

「特技が鍵開けの高校生ねえ……そんな人、漫画の世界でしか見たことないけど」

葵の皮肉が俺の胸にグッサリ刺さっている間に、持ち前の好奇心を発揮し出したウメが、俺の靴箱の中を覗き込んでいた。上下左右、靴箱の内側をコンコンと叩いている。

「どーした、ウメ？」

「いや、もしかしたらこの中の仕切り板が外れたり、この戸ごと取れたり、なんか仕掛けが見つかるかなーと思ってさ……でもダメだ。アリンコ一匹しか見つからねえや」

「なるほど、その手があったか……」

うっかり口に出してしまった、正直者の俺。すかさず葵が「大木クンって眼鏡キャラだけど、意外に賢くないのよね」と、水瀬さんに内緒話を囁きかける。

ていうか内緒になってねえ……。

「チガウ、今日は寝不足で頭の回転が鈍って」

と、我ながら見苦しい言い訳をしようとした俺は、一つの事実に気付いた。

あの方法なら――

「おい、ウメ」

「なんだよ」

俺の靴箱をガタガタやっていたウメが、振り向きもせずに生返事をする。

「やっぱり犯人は、お前だなっ？」

「ほう……その説の根拠を聞こうじゃねーか」

ウメは威圧感たっぷりの鋭い目で俺を見下ろし、ゴキゴキと指の骨を鳴らす振りをする。ウメの強烈デコピンを恐れた俺は、慎重に言葉を選んだ。

「お前は、俺の携帯にこの靴箱の鍵が付けてあるのを知っていた。そして、俺の家はこの学校から徒歩十五分。急げば往復二十分だ。昨夜から俺達はずっと一緒に居たが、明け方俺は二時間ほど熟睡した。その間にお前がここへ来てP&Uを仕込めば」

「はあ？　んなアホなことするかよ。凡ちゃんの隣でぐっすり寝てたっつーの。第一お前ん家って、夜中にドア開けたら警報鳴るんだろ？」

「あっ、そう……だな。よし、その可能性もナシ、と」

俺はさも当たり前前のことを確認したように、葵が情報を書き込んだルーブリーフに『ウメ…密室アリバイ有り』と加筆した。俺の汚い字を覗き込んできた葵が、「これ読めな過ぎ。アラビア文字？　暗号文？」と、またもや水瀬さんを巻き込んで大爆笑。俺のテンションをどん底まで追い込んだ後、クールに呟く。

「アリバイねえ。でもそれ言ったら密室じゃなくて、消えたP&Uの方については、全員アリバイ無しよ？ 大木クンも含めて、全員が一旦この場所を離れてバラバラになったんだから。ゴリゴだって、本当はすぐ戻ってきてP&Uを捨てて、あんな風にわざわざアピールしに来たのかもしれないじゃない？」

「そりゃそうだよな……」

誰にも不可能な密室と、誰にも可能な消失。

結局こんな風に推理してみたところで、誰かが嘘をついているとしたら、真相は藪の中だ。ましてや名探偵属性もない平凡な俺が、こんな難しいトリックを解ける可能性なんてゼロに等しい……。

意気消沈した俺が、「じっちゃん、すまねえ」とギブアップの言葉の口にしたとき。

「あのね、ちよっと思っただけど……」

水瀬さんが囁く声はか細いのに、なぜか全員を黙らせるパワーがある。

コホンと一つ咳をすると、水瀬さんはパッチリした瞳で俺を見上げて言った。

「私、ミステリ好きで良く読んでるの。アリバイで捜査が詰まったら、もう一回基本に戻ってみるといいかも。例えば、動機とか。先生には、こんな悪戯をする理由が無いよね？ わざわざ学校で揉め事を起こすなんて」

「そーねえ。無理やりこじつけるなら、ゴリゴって大木クンのことお気に入りだから、コミュニケーション取りたかった、とか？」

「んー、コミュニケーションなら、もっと別の方法があるんじゃないかな？ パンツとウン……P&Uじゃなくても、いろいろ考えられるでしょ？」

確かに、とその場に居た全員が頷いた。畳みかけるように、水瀬さんがシンプルな疑問を口にする。

「大木君も、葵ちゃんも、ウメ君も、これがただの悪戯だっと思ってるみたいだけど、悪戯にしてもわざわざこんな手の込んだマネ、

するかなあ？」

その言葉に、俺は焦った。

ウメが……いつの間にか梅宮君じゃなく“ウメ君”と呼ばれてる！俺は大木君のままなのに！

できれば『ヒロ』とか呼んで欲しい……そう念じつつ、俺は水瀬さんの可憐なドヤ顔に見入った。

俺のあだ名は、小学校の頃から『ヒロ』だった。この学校でも、入学当初は皆そう呼んでくれていた。なのに、ウメが俺のことを「ヒロって呼ぶとヒーローみたいでカッコイイからやだ」と拒絶したせいで、俺は“凡ちゃん”に……ッ！

もう何度目かの殺意を込めてウメを睨みつける間、葵はリスのようにぷくつと頬を膨らませながら思索する。

「ミナってボケてるよーに見せて、意外と鋭い。そう考えれば、変だよねえ。単にビックリさせたり笑わせるだけなら、P&Uじゃなくても良かったワケでしょ。ヘビの玩具入れるとかさ」

「でも、P&Uだから、オレはめっちゃめっちゃウケたけどなっ」

ウメがまたもや思い出し笑いを始めるその横で……俺の脳裏には、何やらもやもやとした疑問が浮かんできた。

「パンツと、ウ○コ……？」

あごに手を当て『考える人』のポーズを取った俺の脇から、沈黙を破るブブブという機械音。ウメがズボンのポケットからケータイを取り出す。

しばし楽しげに会話した後、ウメは俺の肩を叩き言った。

「ほい、凡ちゃんのオカンから電話」

「人のケータイ勝手に取るなよ！」

そう叫んで、俺は気付いた。

さっきウメに靴箱を開けさせたときから、携帯を預けっぱなしだったのだ。まるっきり同じ機種で、似たようなストラップをつけているから分からなかった。

慌ててそれを奪い取った俺に「帰りに豆腐を買って来い、男前じ

やなくてジョニーの方だ」という母からのミッションが言い渡される。

げんなりしつつも、いつものように「ポッシブル」と返事をする俺の横で「お母さん、ご馳走さまでした!」と葵が大声を出した。

「あら、葵ちゃんも傍にいるの? ちょっと代わって」と言い出した電話をプチッと切る。

「ったく、こんな大事なときに何で……せっかく何か浮かびかけたっつーのにっ」

思いつきり不機嫌になる俺の背中をぽんと叩き、葵が言った。

「そろそろタイムリミットだよ。謎が解けないままってのはしゃくだけど、一旦教室戻ろ? また何か気が付いたら話し合うってことで。そーだ、文化祭の件もあるし、ミナも二人に一応メアド教えてあげてよ」

葵のグッジョブにより、俺は不機嫌をあっさり返上。

ホクホクで水瀬さんの名前を携帯に入力していると、速攻作業を終えたウメが邪魔しにかかる。

「そーいや、水瀬さんって何で『ミナ』なの? 咲子の『サキ』でもいくね?」

「サキかあ、あんまり慣れないかも。小さい頃からずっと、名字の方で呼ばれてたから」

「あ、そーなんだ。でも水瀬さんって、最近ご両親が別れたんだよね。名字変わったんじゃねーの?」

あまりにもデリカシーの無いウメの発言。俺と葵が、左右からデコピンの構えをつくる。

と、水瀬さんは何事も無いように、ニッコリ微笑んで告げた。

「うんとね、ちょっと複雑なんだけど、うちのお母さんって元々シングルマザーだったの。小学生のときに結婚したんだけど、籍入れないで“内縁の妻”って形で一緒に暮らして、今回また別居することになって……だから私は、ずっと“水瀬”なんだ」

その台詞を耳にした俺の身体は、一瞬動きを止めた。スイッチが

切れたアンドロイドみたいに。

鈴が鳴るような軽やかな声が、俺の脳みそをぐるぐるとかき混ぜる。水瀬さんのブラウスの胸で、ケータイのストラップが揺れる。トラッドなスーツを着こなした、可愛いテディベア。

さっき浮かびかけて消えた疑問が、入道雲のようにむくむくと湧きあがってくる。

同時に、すっかり忘れていた……いや、忘れたかった記憶の扉が開かれていく。

鍵の閉まった南京錠。

ウメが取ってしまった、そっくりな二つの携帯電話。

そして水瀬さんの過去と、パンツとウ○コに関する遠い記憶……。

パズルのピースがはまるように、俺の頭は一つの結論を導き出していた。

その4 (完)

放課後の屋上は、早朝以上に静かだった。

雨が近づいているのか、薄暗い曇り空から吹きつける風は、湿り気を帯びて冷たい。薄手のワイシャツとズボンでは少し肌寒い。より薄手のブラウスとミニスカート姿の女子は、俺達以上に寒く感じるだろう。

緊張のせいもあって冷えた指をこすり合わせると、カチカチと金属音が鳴った。

俺の手には、いつも靴箱に引っかけてある南京錠が握られている。U字のフック部分を押し込むだけで簡単にロックがかかる、シンプルな鍵だ。

それを指でいじりながら、俺はこの事件の流れをもう一度頭の中で整理した。

まずは『密室P&U事件』だ。

昨日の夕方、俺はこの鍵をかけて帰宅した。その時、靴箱の中には何もなかった。今朝登校して、ウメに靴箱を開けさせるまでは……。

靴箱の側面や扉に仕掛けはない。つまり、犯人は確実にこの鍵を開けて、P&Uを入れたことになる。

直後の『消えたP&U事件』については、誰にもアリバイは無い。ゴリゴも含めて、全員がP&Uを隠せたことになる。教室やトイレや用務員室、または職員室へ行くフリをして、一旦靴箱の影に隠れる。俺が立ち去った後、すばやくP&Uを処分すれば良いのだ。

PもUも、サイズ的にはかなり小さいし、ズボンやスカートのポケットに入れて隠そうと思えば隠せる。ただ、不自然にこんもり膨らんでしてしまうだろうけれど……それこそトイレにでも寄って捨

ててしまえばいい。

「謎は全て解けた……とカッコ良く言いたいところだけど、細かいとこが分かってないんだよねあ」

まあいいか、と俺は思った。

犯人は、もうすぐここにやってくるのだから――。

『ギィイツ……』

錆びついた屋上のドアが、悲鳴のような音を立てて開いた。

そこに現れたのは……。

「どうしたの？ 大木君」

「わざわざごめんね、水瀬さん」

秋風に煽られ、栗色の長い髪が波のように揺れる。

その髪を白く薄い手のひらで抑えながら、彼女は天使のように微笑んだ。



教わったばかりのメアドを活用して、俺は水瀬さんを放課後の屋上へ呼び出していた。

「ここ寒いから、単刀直入に聞くよ……正直に答えて欲しいんだ」

彼女は「何のことか分からない」といった、無垢な仔猫の目で俺を見上げる。

俺の信念はぐらつきそうになる。けれど、言わなきゃいけない。

静まれ心臓、と心の中で怒鳴りつけ、俺は声が震えないように腹の底から息を吐き出しつつ、その一言を告げた。

「――犯人は、君だね？」

彼女は答えなかった。その代わりに、ふっと笑った。

それはいつも見せている温かな笑みではなく、吹きつける北風のような冷笑だった。

「……一応、理由を聞いてあげる。どうしてそう思ったの？」

やはり、話は長くなりそうだ。

俺はすっと彼女に近づいた。今度は野良猫のように怯えた目をし
て、俺を睨みつけてくる。なるべく優しく微笑みかけながら、俺は
彼女の手を引き、給水塔の影の少しだけ風が弱まる場所へと誘導し
た。彼女は俺の手を振り払うと、少し顔を赤らめて「ありがと」と
呟いた。

予想外、いや理想的なツンデレっぷりだ。

蕩けそうになる男心をグツと抑え、俺は考えたことを順序立てて
伝える。

「えっと……最初に思いついたキツカケはね、単純に水瀬さんにだ
け“動機が無い”からだったんだ」

「どういう意味？」

「あの通り、ウメと葵の二人とはいっても馬鹿げたやり取りをしてる
だから、手の込んだ悪戯を仕掛けるのには、単純に“俺をからかう”
って動機がある。ゴリゴは、いつも学生の揉め事を探してる。た
ぶん生徒から頼られたり尊敬されたいんだろうな。俺との接点だけ
ど、たまたま体育の授業でサッカーがあっってから、目をつけられて
たんだよね。サッカー部に入ってからしつこくてさ。まあ、あんなバ
カらしいことをするには、動機が弱過ぎるけど」

「……となると、私には全く動機が無いってことよね。だって大木
君とは、ちゃんと話したのって今日が初めてでしょう？」

彼女を襲う冷たい風に対して、少しでも盾になるよう、俺は胸を
張りながら告げた。

「そう……それなのに、君が“動機を考えろ”って言ったからさ。
行き詰って、犯人探しを諦めかけていた俺に、わざわざヒントを与
えるみたいだね」

なぜ、他の悪戯じゃなかったのか？

なぜ、パンツとウ○コだったのか？

「おかげで俺、思い出したんだ。パンツとウ○コ……この二つの言
葉を良く使ってた時期があったなって。小学校低学年の頃だった」

彼女は唇を噛み、自分を抱きしめるように胸の前で腕をクロスさせる。そうやって腕を組むのは、自分を守りたい気持ちの表れだと、テレビで心理学者が言っていた。

彼女の張った透明なガードを突き破るべく、俺は腹の底に力を込めて語った。

「あの頃、隣のクラスに男勝りな女の子がいてね。いつも俺達男子に張り合ってきた……名前はハッキリ覚えてないけど、確か“みっちゃん”って呼ばれてた」

おぼろげな記憶の中で、こんがり日焼けしたショートカットの少女が顔をくしゃくしゃにして笑う。太陽をバックに「キシシ」と笑い声を立てて。

あれは確か、俺を落とし穴にハマた時のことだ。みっちゃんの背後では、いつもすぐ泣く女子達も俺を見下ろしながら笑っていて、本当に悔しかった。あの落とし穴事件を機に、男子対女子の壮絶な戦争が起こった。

「みっちゃんはいつもズボンだったから、俺らは“男女”ってからかってさ。珍しくスカート履いてきたとき、真っ先にスカートめくりで攻撃したんだ。そしたら、みっちゃんのパンツのお尻に、茶色い熊のイラストがあって……」

そう、みっちゃんのお尻は小さくて、そこにプリントされた熊は可愛かった。

だから思わず、言ってしまった。

「みっちゃんのパンツに、ウ○コがついてる……ってさ。ははっ！」
「笑うところじゃないでしょっ！」

キッと俺を睨みつけるアーモンド形の勝気な瞳が、やせっぽちで気の強いみっちゃんと重なる。胸の中が、懐かしさと甘酸っぱさで満たされていく。

「まあまあ、良く言うじゃん。あの年代の男は、好きな子ほじめたくなるって」

「——ッ！」

俺は自分の放った台詞の意味に気付かないまま、回想を続ける。

みっちゃんは、男子から『ウ○コ』と囃したてられるようになった。当時流行っていた『みっちゃんみちみち』という歌と同じあだ名だったことが災いして。

みっちゃんは顔を真つ赤にしながら「歌うのやめろ！」と追いかけてくる。俺達は蜘蛛の子を散らすみたいに逃げた。男子の集団がバラけても、最後まで俺を狙ってくるから、俺はみっちゃんをからかうのをやめられなかった。

でもその後すぐに、みっちゃんは遠くに引っ越してしまった。そのときはとても寂しかった。先生に住所を教えてもらい、俺は心を込めて手紙を書いた。

ただ、返事は来なかった。俺は布団の中でこっそり涙して、全部を忘れることにしたんだ。これからは、絶対に女の子をいじめないと誓って。

自ら閉ざした記憶の扉は、予想以上に硬かったらしい。それから今日まで、みっちゃんのことは一度も思い出さなかった。転校してきた水瀬さんを見ても、靴箱の中のP&Uを見ても。

水瀬さんは俯き、何かを堪えるように震えている。その儚げな容貌は、みっちゃんと違い過ぎる。

けれど、俺はどっちの女の子も、最強に可愛いと思った。

「……った」

「うん？」

ふと漏れ聴こえた、か細い声。俺は軽く屈み、彼女の唇へと耳を寄せる。

そして次の台詞に、胸を痛めた。

「辛かったの……」

「そうだよな。ゴメンな」

あの頃どうしてとも言えなかった言葉、手紙に記した言葉が、ようやく届けられた。それでも彼女は俯いたままで……。

「一生許さないって思った。大木広人のこと」

「うん、これから復讐してくれていいよ。俺のこと凡人の“凡ちゃん”とか、いっそ“ウ○コ菌”って呼んでくれても構わないから」
「バカ……」

呟いた彼女の大きな瞳から、ポロリと涙の雫が落ちた。



母さんが「いつかどこかで役に立つから」と、常にフレッシュなハンカチを仕込んでいてくれた。それが、本当に活躍する日が来るとは思わなかった。

俺の差し出した水色のハンカチで目元を拭った彼女は、声をあげず静かに泣いていた。

こんな風に、泣き声を我慢することに慣れているんじゃないか……なんとなくそう感じた俺は、彼女の気持ちに少しでも浮上するようにと、不自然なくらい明るい声で問いかける。

「でも水瀬さんがみっちゃんだなんて、全然気付かなかったなあ。見た目もキャラも違うしさ」

「……大木君は、私のことなんてすっかり忘れてたってだけでしょ？ 見た目は変わっても、名前は一緒なんだから」

「うっ……まあ、確かに忘れてたけどさ」

「私の方は、わざわざ大木君が居る学校調べたのに。しかも眼鏡のもしっ子になってても、すぐ分かったのに」

彼女はむっつりと膨れて、さりげなく嬉しいことを言う。俺はニヤケそうになる口元を抑え、神妙な面持ちで伝えた。

「あー、それ一個言い訳させて。俺みっちゃんのこと、あえて忘れようとしたんだ。軽いトラウマっていうか……俺みっちゃんが転校した後、手紙出したんだよ？ 返事が来なくてマジ泣きしたんだから」

すると、彼女は弾かれたようにパッと顔を上げる。

「嘘、そんな手紙知らないよ？ 届いてないもん」

「うーん……もしかしたら、俺の字が汚すぎて郵便屋さんが読めなかったのかもなあ。差し戻そうにも、俺んちの住所も読めないだろうし……」

自虐ネタでまんまと彼女を笑わせることに成功した俺は、調子に乗って当時の思い出を面白おかしく語る。小学生の頃、この町はもつと緑に溢れていて、俺達は日々大冒険を繰り広げていたのだ。

懐かしく愉快な思い出話がひと段落したところで、俺は話の核心に触れた。

「ところでさ、あの密室と消えたP&Uのこと教えてくれよ。アレどうやったの？」

「……もう、だいたい分かってるんでしょ？」

ハンカチを目元から離れた彼女の瞳から、涙の輝きは消えていた。代わりに浮かぶのは、葵と同質の好奇心。

誰にでも振りまく天使の仮面を外して、昔のように明るく活発な“みっちゃん”に戻った彼女は、罫を仕掛けた小悪魔のようにキュートな笑みを向けてくる。

俺は彼女の目の前で、靴箱から持ってきた例の鍵をプラプラと振った。

「とりあえず、この鍵のカラクリだけはね……これ、昨日水瀬さんがすり替えたんだろ？ もう一個同じやつを持ってる」

「うん、大正解」

駅前の百円ショップで売っていて、この学校の生徒も多数愛用している、平凡な鍵。

鍵穴まで一緒なものは無理でも、同じデザインのものなら、誰にでも簡単に入手することができる。

「少し前に、同じ鍵を買っておいたの。たまたま前に読んだ小説に、南京錠のトリックがあったから……アレをやってやろうと思ってね。ちょうど今日は朝早くから文化祭委員の会合があるっていうし、仲良くなる前に思い出させてやりたくて」

不敵に笑う彼女は、スカートポケットから、俺と同じ形の鍵を

取りだした。

「昨日のお昼休みに、大木君の持ってるその鍵と、私が買ったこの鍵を交換しておいたの。ロックがかかってなければ、穴に引っかかってるだけだから、すり替えるなんて本当に簡単」

「俺は何も知らずに、そっちの鍵をロックして帰ったんだな」

「そう。あとは今朝私が大木君達より早く学校に来て、私の持つてゐる方の鍵で靴箱を開けて、アレを置いて……今大木君が持つてゐる、元々の鍵の方をつけ直せば完了」

まるで双子がこっそり入れ替わるみたいに、同じ形の南京錠が、昨夜だけ入れ替わった。

鍵が一つしかないという思い込みが、真実を覆い隠した。

「今朝さ、俺の携帯をウメが普通に取ってただろ？　そこでピンと来たんだ。ウメとは携帯の機種が同じだし、自分のだと思ってたものが人のもかもしれないって。あとは、うちの母親がそっくりな豆腐を『微妙に違う』って言い張ったり……タイミング良くヒントがあつてさ」

「……大木君って、やっぱり頭いいよね。普通そんなことで思いつかないよ」

「まあ結局鍵のトリックが分かったところで、それこそ犯人は誰でもいいことになるんだけどね。決め手は、水瀬さんがくれた“動機”に関するヒントだったから」

他にも、唐突に俺を「信じる」と言ってくれたり、昔話を仕掛けたり、熊のストラップを見せたり。

褒め言葉のつもりで羅列すると、彼女はなぜかシュンと俯いてしまった。

「ごめんなさい。私もまさか、あんな展開になると思わなくて……本当は大木君が自分で靴箱を開けてたはずでしょ？　その後どんな風にごまかすか見てやろうと思ったの。なのに、ウメ君が見つけて大騒ぎするし、先生も来るしで……焦っちゃった」

自分の証言にも矛盾があったのだと彼女は暴露した。保健室を利

用したなら、まずは用務員室に鍵を返してから教室に戻るのが最短ルートだ。だから彼女はあるとき保健室の鍵は持っていなかった。既に用務員室へ寄って、鍵を戻していたのだ。

それなのに、P&U発覚の直後「鍵を返しに行く」と言ってしまった。

「じゃあもしかして、用務員のオジサンに聞き込みしたら……」

「うん、私の嘘がバレてたはず。もし葵ちゃんが『アリバイの裏を取る』って言い出してたら、自分でバラしちゃうと思うんだけどね」

そこまでは俺の想像通りだ。俺はうんうんと頷き、再度問いかけた。

「じゃあ、消えたP&Uの方は？」

「それも簡単なことよ。皆が考えた通り、私は用務員室には行かないで靴箱の裏に隠れてたの。大木君がいなくなつてすぐ、アレを処分したつてわけ。どうやったか分かる？」

俺はしばし空を見上げて唸った後、両手を上げ降参のポーズをとってみせる。

「分からない？ 案外ウメ君が鋭いっていうのが、ヒント」

「ウメが……何だろう？」

「ほら、後からもう一度靴箱を見に行ったとき、ウメ君が見つけたじゃない。靴箱に忍び込んだ侵入者をね」

ペロツと舌を出してみせた彼女が、あまりにも可愛くて……俺は推理どころじゃなくなつてしまった。とっさに顔を伏せた俺を悩んでいると勘違いしたのか、彼女は楽しそうに笑った。

「もう一つ、ヒントあげるね。……小学生の頃、大木君が良く歌ってた、みっちちゃんの歌があつたでしょ？」

「うん、ゴメン」

「もう謝らなくていいから、あの歌思い出してみて？ みっちちゃんが何をしたか」

俺は、その歌詞を記憶から引っ張り出してみた。未だに一字一句

覚えていることに驚きながら。

『みっちゃんみちみちウ○コ垂れて、紙がないから手で拭いて、もつたいないから食べちゃった』

「……全く、ひでえ歌詞だよなあ。で、この歌がヒントって？」

「降参する？　だったら教えてあげる」

首を傾げる俺を見上げて、お気に入りチョコレートを頬張ったときのように、ニツコリと微笑む。

その可憐な唇がゆっくりと開いて……。

「歌の通りなの。あのUの方はね……私が、食べちゃった！」

「――なっ！」

「でも、ほんの少し食べ損ねが残ってたみたい。アリさんの嗅覚ってすごいのねえ」

「まさか、アレは……」

「うん、かりんとう。大好物なのっ」

俺はがっくりと肩を落とした。今まであんなに恐れていた物が……あの屈強なゴリゴでさえ、軍手とビニール袋越しに触ろうとした物が、彼女の胃袋に収まっていたとは！

「風邪気味っていうのも、ちよつとしたアリバイ工作なんだ。皆より早く学校来る理由と、あとマスクしてられるようにって。マスクがあれば、白い布を持ってるとか、口もぐもぐさせても多少ごまかせるかなって」

「スゲー、全然思いつかなかった。じゃあ、Pの方はどこに隠したんだ？」

「それは……きやつ！」

唐突に駆け抜けた疾風。

その時、彼女のスカートがふわりとめくれ上がり……俺は、見てしまった。

意外と肉付きの良い太ももの上、ピンク色のパンツの上に重なっ

た、純白のもう一枚を。

「見たっ？」

リングみたいに真っ赤な顔で俺を睨みつける彼女に、俺は素直過ぎる感想を漏らしていた。

「みっちゃん、ずいぶんお尻に肉ついたなあ」

「――バカッ！」

ヒラリと揺れるスカートの裾を抑え、栗色の髪をなびかせて、みっちゃんは脱兎のごとく走り去った。

その後姿を見送りながら、俺は思った。

今朝のみっちゃんは、クールな第三者の態度を装いながら、内心は本気で焦っていたのだろう。良くテレビドラマに出てくる犯人に似た心境で。なんせ、犯行現場であんなアクシデントが発生したんだから。

しかし、いくら焦ったとはいえ……。

「公共の場で、ウ○コを頬張りながらパンツを穿く美少女かあ。うーん、まさに事実は小説より奇なり。そんなの漫画でもありえないって」

独りごちた俺は、ブハッと噴き出した。ひとしきり爆笑した後、眼鏡を持ち上げ目尻に浮いた涙を拭う。

「しっかしみっちゃんも、思い切ったことするよなあ。俺がもっと早く引き返してたら、パンツはいてる決定的瞬間が見られたかも……まあ、そーいやみっちゃんは昔からそんな子だったな。お互いバカな悪戯して、何度も先生に怒られたっけ」

心の奥から引っ張り出された、古いアルバム。

返事の来なかった手紙の悲しさから解放されれば、こんなにも色鮮やかに幼いみっちゃんの姿が蘇ってくる。そして小さなみっちゃんが、今朝まで俺が見ていた『憧れの水瀬さん』へ変化し……ツンデレが可愛らしい今のみっちゃんへとリンクしていく。

吹きつける風の冷たさも忘れ、ゆっくりと順を追って彼女の気持ちを想像していくうちに、俺は一つの事実に気付いた。

ようやく辿りついた最後の謎。

彼女が俺に、こんな罠を仕掛けた理由。

「そっか。みっちゃんは俺に、気付いて欲しかったんだ……」

みっちゃんは、俺のことをずっと覚えていた。

ゴリゴに見つかった後、たぶん俺をかばうためにP&Uを消した。

何よりさっきの、照れたような拗ねたような表情……。

「この推理が、当たってたら嬉しいんだけど」

中学、高校と、それなりに可愛い女子と出会ってきた。でも、ど

んな女の子を見ても心が動かなかった。

「俺もずっと、忘れられなかったのかもな。初恋の相手が……」

秋空にたなびく雲を見上げながら、俺は願った。

彼女にとって俺が、この先もずっと、一人の平凡な男に成り下が
りませんように、と。

その夜、俺は彼女に電話をかけた。

それはまさに、平凡と平和を愛する俺にとって一世一代の大勝負



翌朝。

「——ええっ！ 犯人ってミナだったのっ？」

「んー、ゴメンねっ。ビックリした？」

「かなり……まいった。腰抜けそう」

ぐったりと力なく崩れ落ちかけた葵の身体を、背後に居たウメが
さりげなく支える。普段はノリが良くお喋りなウメも、「食べちゃ
った」という無邪気なカミングアウトはさすがに想定外だったのか、
口をぽっかり開けて絶句している。

二人のリアクションを見て、アハハと明るく笑い飛ばした水瀬咲
子の髪は、さっぱりしたショートヘアに代わっていた。アイドルが

舞台を降りて、普通の女の子に戻る……それくらい見事なイメチェンだ。

俺は露わになった白いうなじに見とれつつも、なんとか口を開く。いつもと変わらない、平凡過ぎてあくびが出るような質問を。

「それにしてもみっちゃん、その髪型どーしたんだよ？ 昨日の電話では切ったなんて言ってなかったのに」

「ふふっ。ヒロ君を驚かせたくてねー。どう？ 昔みたいでしょ。

長いのと短いの、どっちがイイ？」

俺達の、ナチュラルを装いつつも違和感たっぷりの会話に、ウメと葵が生氣を取り戻す。

「……“みっちゃん”？」

「……“ヒロ君”？」

訝しげな二人の視線を浴びて、照れ笑いするのが精一杯な俺の背中を、頬を染めた彼女が『ちゃんと言え！』というように、力一杯叩いた。

その4 (完) (後書き)

←解説&作者の言い訳(痛いかも?)です。読みたくない方は、素早くスクロールを。

「かりん糖はウンコに似ている!」……それだけで発案した話でした。結果、非常にバカバカしい内容になってしまい、ミステリとは堂々と言い難い感じに。スンマソン。しかしラストの爽やか感は、あたかもウンコがつるんと出たかのようなry ※ちなみにこの作品は一昨年夏に書いたものですが、当時の某企画のキーワード『5、嵐、英雄、一世一代の大勝負、ケンカ仲直り』も使ってみましたりしております。縛りがあった方が筆が進む不思議……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0054z/>

凡人・大木広人の事件簿 ～密室、消えたP&Uの謎～

2011年11月30日15時53分発行